

---

# 名探偵とチルドレン

白波

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

名探偵とチルドレン

### 【Nコード】

N9966V

### 【作者名】

白波

### 【あらすじ】

一度サードインパクトを経験し歴史を変えるために翻弄していた、シンジはカヲルとの決戦を控える中、レイと共にNERVから逃げ出したしまう。しかし、その途中謎の光に包まれ目が覚めたら、名探偵コナンの世界に来ていた。女の子になってしまったうえ、レイと一緒に幼児化してしまったシンジの話。エヴァの登場人物が容疑者として登場したりします。2オリキャラも登場します。

## プロローグ

サードインパクトの後、時をさかのぼりすべてが始まったあの日からやり直していたシンジは参号機のトウジを無事に救出したり、レイの自爆を阻止したりと歴史を変え、確実に良い方向へ向かっているはずだった。しかし、もう一度、カヲルと戦えなければならぬ時期が近づいている中それに耐えられなくなったシンジは歴史を変える上で良き協力者であったレイと共に、二人でNERV本部から逃げ出した。

### 第3新東京市 郊外

「綾波：まだ歩ける？」

とシンジが聞くとレイは

「大丈夫…。」

と答えた。

もう二人でNERV本部を出てからどれだけの時間がたっただろうか…二人はエヴァのパイロットであるが表向きにはただの中学生である。車などはつかえないうえ、エヴァのパイロットとして得た報酬は、まだ、二人が中学生のためシンジの分はミサト、レイの分はゲンドウが管理していたため自由に引き出しことができず、金銭的にも豊かじゃないのであまり遠くへいけないことはわかっていた。（とにかくできるだけ遠くへ行かないと…できる限りの長い時間NERVに連れ戻されないような遠くへ…。）

シンジもレイもNERVから逃げ切れないことはわかっていた。しかし、とにかくNERVから離れたかったのだ。

「碇君：あれ…。」

と言いながらレイが向こうの方を指差した。その指の先には恐らく自分たちを探しに来たのであろうNERV諜報員が見えた。シンジが「逃げなきゃ！」

と言いながら走り出そうとしたとき突然二人はかなりまぶしい光に包まれそのあと何かに飛ばされるような感覚がした。

その直後その場所にNERV諜報員が来たがそこに二人の姿はなかった。

それと時を同じくして日本全国で多数の人が失踪する不可解な事件が起きていた。

## プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからよろしくお願いします。

## 第巻話 目覚めたら…

「ここは…。」

とつぶやきながらシンジは起き上がった。体に何か違和感を感じながらあたりを見渡すと目覚めのない風景が見えた。そして、後ろを見たとき倒れているレイが視界に入った。

「綾波！」

と言いながら駆け寄るとレイは

「碇君？」

と言った。

「そつだよ、綾波、無事？」

「…。」

「綾波？」

とシンジが呼びかけるがレイは返事をしない。彼女にしては珍しく何かに驚いているようにも見える。

「どうしたの…綾波？」

と聞くとレイはシンジを指差し

「碇君…体…。」

と言った。

「体？」

と言いながらシンジが自分の体を見るとなんだか先ほどの違和感の答えがわかってきたような気がした。

（まさか！）

と思いながらズボンの中に手をつ込むとそこにあるはずの物がなかった。シンジが恐る恐るレイに

「綾波の体は大丈夫なの？」

と聞くとレイは

「問題ないわ…。」

と答えた。

「つまり…僕は女の子になっちゃったけど綾波はそのままってこと？」

とシンジが聞くとレイは

「そのようね…。」

と答えた。

「まずは状況を整理しないと…まずここはどこなんだろう…。」

とシンジが言うとレイは

「わからないわ…町に出れば何かわかるかも…それと碇君…これ…。」

「

と言いながらカバンから白色のワンピースを出した。

「着替え用について思ってた前に碇君にもらったの持ってきたんだけど、碇君、その格好のままじゃ不自然だから…。」

と言いながらワンピースを差し出した。

「ありがとう…。」

と言うとシンジは草むらの陰で着替えレイと共に近くにあった道に沿って歩き出した。

しばらく歩くと町に出た。とりあえずシンジは公園のトイレに入り鏡を見た。その鏡に写ったのは黒髪の少年ではなく黒い髪を長く伸ばした少女であった。

（これからどうすればいいんだよ…。）

と思いながらトイレから出るとあたりが暗くなり始めていた。

「綾波…とりあえずどこか行こうか？」

と言いながら歩き出した。

少し歩いているとレイが

「碇君…新しい名前考えないと…。」

と言った。

「どうして？」

「だって女の子になったのに碇シンジって名前じゃ不自然じゃない

…。」

とレイに言われシンジは立ち止まり少し上を向いてから

「そうだな…碇…碇ユイって言うのはどう？」

と言った。

「碇ユイ？」

とレイが聞き返すとシンジは

「そう…碇ユイ…母さんの名前なんだ…。」

と言った。

「そう…いいんじゃない？」

とレイが言つと二人は再び歩き出した。

それから二人は他愛もない話をしながら夜の街を歩いて行つた。

すると偶然迷い込んだ路地で黒い服を着た男たちが何かをしているのが見えた。

「これだな…。」

と黒服の男が言つと取引の相手らしき男性が

「もうこれでいいだろ…頼むから勘弁してくれ…。」

と弱い声で言つた。ユイとレイがその様子を見ていると後からいきなり何かで殴られた。

「おい！ガキどもこんなところで何をしている！」

と金髪の男が言つと取引をしていた男が

「こいつらに見られたんですかい？」

と言つた。

「ああ…。」

と金髪の男が言つともう一人の男は懷から拳銃を取り出し

「やっちまいやすか？」

と言つと。金髪の男は

「待て…あの女の薬を使う…。」

と言いながら薬のカプセルを取り出した。

「えっ！兄貴、その薬は…。」



ともう一人の男が言う頃にはその薬をユイとレイの口に入れていた。  
（なんだか、体が熱い…）  
と思いながらユイは気を失った。

**第壱話 目覚めたら…（後書き）**

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

## 第貳話 見知らぬ天井

ユイが目を開けると見覚えのない天井が目に入った。

「ここは…。」

と言いながら体を起こすと

「おっ！目が覚めたか！」

と言いながら一人の老人が言った。

「綾波は？」

とユイが言つとその老人は

「綾波？君と一緒に倒れていた女の子か？その子だったらそつちに  
いるぞ…。」

と言いながら隣のベットを指差した。ユイがそつちを向くとそこには小学生ぐらいの空色の髪をした少女が眠っていた。ユイが  
「綾波は僕と同じ中学生ですよ…あんなに小さいわけ…。」

と言つと

「APTX4869…。」

とふいに後ろから声がした。

「えっ！」

と言いながらユイが後ろを振り向くとそこには白衣を着た赤みののか  
かった茶髪の少女がいた。

「なんだよ…そのアポトなんとかって…。」

とユイが聞くとその少女は

「APTX4869…細胞破壊プログラムの誘発的な作用により神経系を除く骨格、内臓、筋肉、体毛のすべてを幼児化させる神秘的な毒薬つてところかしら…。」

と言った。

「幼児化つてまさか僕に体も！」

と言つとその少女は

「あなたもよ…。」

とさらつと答えた。その時レイが  
「うん…。」

と言いながら起き上った。ユイが

「綾波、大丈夫？」

と聞くとレイはまたも驚いた様子で

「碇君!？」

と言った。茶髪の少女が同じような説明をするとレイは

「そう…。」

と短く答えた。ユイは二人の会話を聞きながら

(この二人声が一緒だからどっちが話しているか分かりづらいな…。  
)

と思っていた。しばらくして老人に

「そういえば君たちはどこの誰なんじゃ？」

と聞かれた。ユイが

「はい…第3新東京市の…」

と言いかけると茶髪の少女が

「第3新東京市?聞いたことない町ね…」

と言った。

「えっ!ほら…要塞都市の…」

「そんなとどこにあるのよ?」

「芦ノ湖畔に…」

とユイが答えるとその少女はあきれたような顔で

「バカね…そんな街あるわけないでしょ…」

と言った。

「とにかくもう少し話を聞いてみましょうか…」

「だから、第3新東京市の郊外を歩いていたら急にまぶしい光に包まれて知らないところにいたんだ…それで目が覚めたら僕の体が女の子になってるし、どうしようかと綾波と二人で歩いてた黒い服の男たちの取引現場を偶然見て、薬を飲まされたらこんな体…」  
とユイが説明すると茶髪の少女は少し考えるような姿勢と取り

「つまり…あなた達は異次元から飛ばされてきたのね…」

と言った。すると横にいた老人が

「しかし、哀君そんなことが…」

と言った。すると哀は

「いい、時空と言うのはいくつもの空間が複雑に入り混じってできているの…それらはほとんど交わることはないけど、もし、何らかの理由で偶然交わった場合今回のような現象が起きると思うわ…ただ、これには科学的な根拠は全くないけど…どうしても信じられないなら、実際に今度芦ノ湖畔に行ってみる？」

と言った。するとユイは

「そうだね…僕の名前は碇シンジって言うんだ。今は碇ユイって名乗ってるけど…」

と言うとレイが

「私は…綾波レイ…」

と言った。

「私は灰原哀よ。そしてこっちが阿笠博士。そういえば綾波さんだっけ、あなたも偽名考えた方がいいんじゃない？」

と言った。するとユイが

「でも、異次元から来たんだから考えなくてもいいんじゃないの？」  
と言った。すると哀は

「そうね…あと、行くところがないなら家にいなさい…」

と言うと阿笠博士と一緒に部屋を出て行った。

第弐話 見知らぬ天井（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

## 第参話 徐々にわかる現実

神奈川県 芦ノ湖畔北部

そのにあるのは使徒からの攻撃に対抗するべく作られた要塞都市ではなくごく普通の街と山林が広がっているだけだった。リニアルはなく、兵装ビルもNERVもジオフロントさえなかった。

「本当に異次元に來ちゃったんだ…。」

とユイがつぶやくと哀は

「ここにあなたが言っていた要塞都市があつたの？」

と言うとユイは静かにうなずいた。

「ところで、できればいいんじゃないが家に帰ったら少し話を聞かせてくれんかのう？」

と阿笠博士が言うるとユイとレイはうなずいた。

「それじゃあ帰るわよ…。」

と哀が言うると阿笠博士とユイ、レイは阿笠博士の車に乗り込んだ。

ちょうどそのころ

「どこや…どこ…。」

と言いながらトウジが目を覚ますとケンスケとヒカリそしてリツコが視界に入った。するとポニーテールの高校生ぐらいの少女が部屋に入ってきて

「目覚めたんかいな！よかったわー。」

と言った。

「ここは…どこや…。」

とトウジが言うとその少女は

「ここか？ここは平次の家やあんたらこの家の前に倒れとったんやで。そうそう忘れるとこやった…わいは遠山和葉ってゆうねんあんたは？」  
と言った。

「わいは鈴原トウジや…。」

「そっちの三人は知り合いか？」

「向こうから赤木博士に洞木ヒカリ、相田ケンスケや…。」

と言った。すると和葉は

「ちよつと待つててな…。」

と言うと部屋を出て行った。

和葉が出て行った直後ヒカリとケンスケ、リツコが目覚めた。

トウジがここは平次という人物の家でその家の前で倒れていたらしいと話すと三人は首をかしげた。

「その話が本当だとすると…離れた場所にいるはずの私たち四人が同じ場所に倒れていたのよね…。」

「確かにそうなるよね。」

とケンスケが言うのと和葉と色黒の少年が入ってきた。色黒の少年は「わいは関西では名の知れた高校生探偵の服部平次や…さっそくでなんやけど、なんであんなところに倒れつつたか教えてくれへんか？」

と言った。

「それが…突然白い光に包まれて気が付いたらここにいたんだ…。」  
とケンスケが答えると平次は

「白い光？なんや変わったもんやな…それまではどこにいたんや？」

と聞いた。するとリツコが

「私は第三新東京市の…」

と言いかけると平次が

「何言つとるのや…そんな町見たことも聞いたこともないわ…。」

と言った。するとリツコが

「少し地図を見せてくれる？」

と言った。

「ええで…。」

と言うと平次はどこからか日本地図を持ち出してきた。

リツコは地図を見ると



「やっぱり…。」

とつぶやいた。

「なんや？ やっぱりって…。」

「第三新東京市は次に首都になるといわれていた都市よ…それを知らないってことは異次元に來たかもしれないって…今、この地図を見てはつきりしたわ…。」

と言いながら地図を見せた。地図を見るとヒカリやケンスケ、トウジでさえわかるような違いがあった。

「異次元から來たのかなにゆうつるんや？」

と和葉が言つとリツコは

「ええ…そのままの意味よ…時空というのはいくつもの平行世界で構成されているの…その時空間の一つが何らかの原因で別の時空間と接触した場合どちらかの人間がもう一方に飛ばされる可能性があるの…。」

と言った。

「そんなことあるんかいな？」

「科学的根拠はないけどね…。」

**第参話 徐々にわかる現実（後書き）**

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

## 第四話 コナン登場

米花町 阿笠博士の家

「いい加減起きたら？」

と誰かの声がする。

「わかったよ…。」

と言いついで起きると哀がベットの横にいた。横にベットに誰もいないことからレイはすでに起きたようだ。

「おはよう…。」

と言いついでユイが居間へ行くと

「お前が碇ユイか？」

と居間にいたメガネの少年に話しかけられた。

「はい…そうですね…あなたは？」

とユイが聞くとその少年は

「俺は江戸川コナン…探偵さ…。」

と答えた。

「江戸川…コナン？」

とユイが言いついで哀が

「そう…江戸川コナン…本名は工藤新一…あなた達と同じようにあの薬で体を小さくされた高校生探偵よちなみに。」

と言った。

「初めまして…碇ユイです…。」

とユイが自己紹介するとコナンの携帯が鳴った。コナンが

「もしもし…服部か？どうしたんだよ…。」

と話を始めるとユイは

「あの…服部って誰ですか？」

と哀に聞くと哀は

「工藤君と同じ高校生探偵で東の工藤、西の服部と並び称されているわ…。」

と言った。ユイが

「そうなんだ…。」

とつぶやくとコナンが

「ユイ…第三新東京市って町知ってるか？」

と聞いた。ユイが

「はい…知ってますけど…。」

と答えた。

「大体どのへんだ？」

「芦ノ湖畔です…。」

とユイが答えるとコナンは再び電話を始めた。

電話が終わるとコナンは

「服部の奴今から来るから迎えに来いってさ…。」

と言った。ユイが

「ところで…聞きたいんですが…。」

と手を挙げた。

「なんだ？それと敬語は使わなくていいから…。」

「さっきの電話で第三新東京市の事を聞いたの？」

とユイが質問するとコナンが

「ああ…それなら服部のところに異次元から来たとかいうやつらがいるんだかなんか知らんか？って言うもんだからお前らが異次元から来たって灰原に聞いてたもんで確認のつもりで聞いたんだ…。」

と答えた。

「なるほど…。」

とレイが言うとコナンは

「お前の声…灰原にそっくりだな…。」

と少し驚いたように言った。

「あら…そうかしら？まあいいわ…。」

と哀が言うとユイが

「そつえば気になっていたんだけど…。」

と言つと哀は

「何かしら？」

と言った。

「あなたは…いったい何者なんですか？とても小学生とは思えないんですけど…。」

とユイが聞くと哀は

「あなた達と似たようなものよ…本名は宮野志保…工藤君や私、あなた達が飲んだAPT-X4869の開発責任者の一人よ…。」  
と言った。

「開発責任者って…。」

「あとあなた達にあの薬を投与した連中についても説明しておくわ…工藤君は黒の組織って呼んでいるけど…奴らは目的のためなら人殺しだつてする手段を択ばない奴らよ…おそらくあなたから聞いた特徴からあなた達に薬を投与したのはジンとウォツカ…。」  
と哀が言つとレイが

「開発責任者ってことは、あなたもその組織の一員なの？」  
と聞くと哀は

「元ね…コードネームはシェリー…私はあの組織を裏切つたのよ…だから奴らに狙われているわ…。」  
と答えた。

「狙われてるって…。」

「大丈夫よ…奴らはこの薬の副作用に気づいてないわ…。」

と哀が言つとレイが

「つまり…私たちがその薬で小さくなつたつて気づかなければいいのね…。」

と言った。

「そうよ…。」

と哀が答えるとコナンが

「そろそろ服部のむかえに行こうぜ…。」  
と言つて四人は家を出た。

#### 第四話 コナン登場（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

やっとコナンが登場しました…。

これからもよろしくお願いします。

## 第五話 大阪から来た探偵

東京都 米花駅

コナンと哀、ユイ、レイ、阿笠博士が駅にいます

「よう！くど…やなかったコナン君たち！わざわざ悪いな！」

と言いながら平次と和葉、金髪の女性、ジャージを着た少年、メガネをかけた少年、そしてそばかすがある少女がやってきた。

（えっ！リツコさんに、トウジにケンスケに委員長！？なんで？）

と思いながらユイがまじまじと見ているとリツコが

「その後の二人…どこかで会った？」

と聞いた。

「さ…さあ知らない…わ…。」

（このしゃべり方ってなんかまだ慣れないな…。）

と思いながら答えるとリツコは

「そう…ならいいんですけど…。」

と言ったが完全に二人に疑いの目を向けている。

「とにかく行こうか…和葉は毛利のこのねーちゃんと一緒に東京案内したれや！」

と言つと和葉は

「わかったわ…ほな行こう…。」

と言いながら行こうとしたがヒカリが

「ちよつと待つて…私たちが異次元から来たっていう証明をした人と話がしたいんだけど…」

と言った。すると和葉が

「そんなことより！とりあえず東京観光楽しんで来ればええやん！」  
と言ってヒカリの手を引っ張り出した。

「そつやで委員長！しっかり楽しまな！」

とトウジが言つと

「ほな行くか！」

と和葉が言い六人は毛利探偵事務所に向かった。

六人が行くと平次が

「それで…工藤…その二人か…小っこくなったんは？」  
と聞いた。コナンが

「ああ…とりあえず阿笠博士のところへ行こう…。」  
と言った。

「せやな…。」

と平次が答えると六人は阿笠博士の家に向かった。

東京都 米花町 阿笠博士の家

六人が阿笠博士の家に入ると平次が

「ところでもう一度確認するねんけど…小っこくなっでもうた中学生つてのがその二人なんやな？」

と聞いた。哀が

「ええ…そうよ…。」

と答えると平次は

「そうか…。」

と言った。それから少し間を開けて

「それ以外にも異次元から来たり女の子になっでもうたり大変やな…。」

と言った。

「そついや…服部お前が連れてきた四人組何者だ？」

とコナンが言うと言いは

「リッコさんとトウジとケンスケと委員長…。」

とつぶやいた。

「知り合いかいな？」

と平次が言うと言いは

「うん…。」

と短く答えた。すると平次は

「何者なんや…あの四人は？」



と聞くとユイは

「トウジとケンスケ、委員長は同級生…リツコさんは科学者…。」  
と答えた。

「なるほどな…それで…」

と平次が言つとレイが

「私たちがどうするか…でしょ…。」

と言つた。すると平次が

「お前…その小っこい姉ちゃんと声にとるな…それはともかくそういうことや…」

と言つた。するとユイが

「それについては…話しても信じてもらえないだろうし、元の世界に戻る保証はないからしばらくここでお世話になろうと思うんだけど…」

と言いながら哀と阿笠博士の方を見た。

「私はかまわないわよ…」

と哀が言つと阿笠博士は

「まあ哀君がそついうのなら…」

と言つた。すると平次が

「そろそろ和葉たちと合流しようや…くれぐれもあんならの正体バレんようにな…」

と言いながらユイとレイの方を見た。

「もちろんだよ…」

「ええ…」

と二人が答えると六人は阿笠博士の家を出た。

## 第五話 大阪から来た探偵（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

## 第六話　こちら毛利探偵事務所

東京都　米花町　毛利探偵事務所

「お邪魔するで！」

と言いながら平次が入ると

「あつ！服部君にコナン君！それに哀ちゃんまで……。」

と言いながら蘭が出てきた。

「和葉たちはどこや？」

と平次が聞くと蘭は

「和葉ちゃんたちならさっきまでここにいたんだけど……。」

と言った。

「どっか行つてしもうたか？」

と平次が聞くと蘭は

「そうなのよ……ところで哀ちゃんの後ろにいる女の子たち……誰？」

と言った。

「碇ユイって言います。よろしくお願いします。」

とユイが言つとレイは

「……綾波レイです……よろしく……。」

と言った。すると蘭は

「ユイちゃんにレイちゃんね！二人ともよろしく！」

と言った。

「ともかく和葉姉ちゃんたち探しに行こう！」

とコナンが言つと平次は

「そうやな……いくで！」

と言つて毛利探偵事務所を出た。

東京都　米花町　米花公園

コナンたちが米花公園へ来ると光彦と歩美、元太、和葉、リツコ、ヒカリがいた。

「コナン君に哀ちゃん！平次お兄さんまで！」

と歩美が言っているとコナンは

「よお！おめーら！」

と答えた。すると歩美がユイとレイの方を見て

「ところで…その二人は？」

と聞いた。

「綾波レイさんと碓ユイさんよ…。」

と哀が言っていると歩美は

「レイちゃんにユイちゃんね！私吉田歩美！それでこっちが小嶋元太君であつちが円谷光彦君！」

と言った。

「こいつら帝丹小学校に転校してきたんだ。」

とコナンが言っていると歩美が

「それじゃあ二人とも少年探偵団に入らない？」

と聞いた。

「探偵団？」

とユイが聞くと歩美は

「うん！いろんな謎を解明したりするの！」

と説明した。

「とりあえず学校行ったらしっかり説明するからさ！一緒に遊ぼう！」

と歩美が言っていると平次が

「すまん…これから少しこの子たちと用事があるんや…和葉！いくで！」

と言った。

「そうやった！はよいかな！」

と言っていると和葉はリッコやヒカリどこからか現れたトウジとケンスケを連れて平次たちについて行った。

「やつと全員そろった…。」

と蘭が麦茶を出しながら言うつと平次は

「すまんのう…姉ちゃん…。」

と言った。

「いいのよ…気にしなくて…。」

と蘭が言うつと平次が

「そうや…話つてのは…この四人の事なんやけどな…。」

と言いなながらリツコたちの方を見た。

「リツコさん達がどうかしたの？」

と蘭が聞くと和葉は

「それがな…簡単に信じられへんかもしれへんけど…この人たちな…  
…なんというか…異次元世界からやってきたらしいんや…。」

と言った。すると蘭は

「まさか！そんなことあるわけ…。」

と言ったが平次が

「俺も最初は信じられへんかったんやけど…この姉ちゃんとの電話  
でこの人たちが言ってることが本当やと確信できたんや…。」

と言いなながら哀の方を向くと哀は

「ええ…確かに異次元とかそういう話は簡単には信じられないけど、  
時間や空間と言ったものはいくつも存在するわ…たとえば和葉さん  
が私たちが探偵事務所に来る前に出て行った今の世界と、そうでは  
ない世界…些細なことかもしれないけどそれがなければ碇さんや綾  
波さんは吉田さん達にはこの日に出会わなかった…それが積み重な  
って平行世界や異次元といった物が生まれてくる…だから、そうい  
うものが全くないともいえないわ…ただ…何人もそういう人がいれ  
ば信憑性が高くなるしその逆なら低くなる…。」

と説明した。

「つまり…身近で最近突然現れてそんなこと言ってるやつがおらん  
か聞きに来たんや…久しぶりにくど…やなかったコナン君の顔も見  
たかったしな…。」

と言った。

「私の身近にはいないけど…」

と蘭が答えると平次は

「そうか…」

と短く答えた。

**第六話　こちら毛利探偵事務所（後書き）**

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

## 第七話 容疑者 葛城ミサト

コナンと哀、ユイ、レイは阿笠博士と共に箱根に向かっていた。  
「お前らの知り合い…見つかるといいな！」

とコナンが言うとユイは

「まあ…リツコさんやトウジに限らずほかにこっちの来た人がいて  
としても現状じゃ会えないけど…」

と言った。するとレイは

「でも…ほかにだれかいないか確認することは大切だわ…。」  
と言った。

「そうね…とりあえずその意味でも第三新東京とか言う町がある場  
所を探すのはいいんじゃないかしら…ほかにいればだけど…」

と哀が言うと阿笠博士は

「じゃがその時に一緒におらんかった人がこっちに来ておるなら他  
に人がおらんとは考えずらいじゃろうし、それが確認できれば何と  
かできるじゃろうしな…」  
と答えた。

箱根 某所

「さて…ここからは徒歩で登るぞ！」

と阿笠博士が言うとコナンは

「マジかよ！」

と言った。すると哀は

「まったくまにはいいんじゃない？行きましょう…」  
と言って登山道を歩き出した。

三十分後…

「みんな待ってよ！」

「待ってくれ！」



とユイと阿笠博士が休憩をしたいと申し出る。

「まったく…博士が歩くって言ったんでしょ…私達は先行くから後からついてきなさい…。」

と哀が言っているとコナンと哀そしてユイに気を使ったのか少し遅れてからレイが歩き出した。

## 展望台

「やっと着いたぜ!」

とコナンが言っているとレイは

「…碇君が気になるからいったん様子見てくる…。」

と言って元来た道を戻ろうとしたが哀が

「大丈夫よ…阿笠博士はちゃんとした大人なんだから…こつち来てみなさい…いい眺めよ…。」

と言っているとレイは少し経ってから哀の方へ歩いて行つた。

すると大きな音を立ててコナンと哀、レイの三人の前に人が落ちてきた。

「なにか音がしたがあつたのか!」

と言いながら阿笠博士が展望台に來るとコナンは

「博士!警察呼んで!」

と言つた。

「わかつた!」

と言いながら阿笠博士は携帯を取り出したが

「ここは圏外みたいじゃから中腹にあつた観光案内所まで行つてくる!」

と言ひ残し山を下りて行つた。

しばらくたつと神奈川<sup>にじやま</sup>県警の横溝警部ではなく同じく神奈川<sup>にじやま</sup>県警の西山刑事が到着した。

「それで…あなた達がここに落ちてきた<sup>ひろまち</sup>広町さんの遺体を発見した

わけですか…。」

と西山刑事が聞くとコナンは

「そうだよ!」

と答えた。

「それでその時ここにいて遺体を発見した阿笠さんには犯行は無理…小学生はもちろん論外…ということは…時間的に遺体が落下したと考えられる上の展望台からここへ来るには必ずこの場所を通らなければならぬ…つまり犯行が可能だったのは事件発生から約二十分後に上の展望台に行く道から降りてきた葛城ミサトさんということになる…。」

と西山刑事が言つとミサトは

「ちよつち待ちなさいよ!私はそんなことしてませんよ!」  
と言つた。

「とにかく!まずは、上に行つて現場検証しましょう!もちろん容疑者である葛城さんも遺体を発見した阿笠さん達も!」  
と言つと西山刑事は山を登り始めて皆はそれに続いた。

第七話 容疑者 葛城ミサト（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9966v/>

---

名探偵とチルドレン

2011年10月10日14時07分発行